様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520349
研究課題名（和文）　明清の王朝交替と杜詩学

研究課題名（英文）　Ming-Qing Transition and Study on Du Fu’s poems

研究代表者
大木　康　（OKI YASUSHI）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：70185213

研究成果の概要（和文）：
明王朝の滅亡後、清朝は、再三にわたる「文字獄」を行うなど、漢人知識人に対してきびしい姿勢で臨んだ。漢人知識人の屈折した意識は、詩作品、あるいは詩学（詩の解釈学）の場において、きわめて隠微な形であらわれる。そんな状況のもと、清初の時期には、杜甫の詩についての選集、注釈、批評などが数多く生みだされた。本研究では、当時の人びとが好んで杜甫の詩を取り上げた理由などの分析を通じ、清王朝の支配という事件が、当時の文人たちにどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目指した。
この研究にあたり、主として着目したのが、明末清初を生きた冒襄とその周囲にいた文人たちであった。冒襄自身の詩作を見ると、そこにはしばしば杜甫の詩に和韻を試みた作を見ることができる。例えば冒襄の「感懐七歌　倣杜少陵体」は、杜甫の「乾元中寓居同谷県、作歌　七首」に和韻した作である。同谷県にあって杜甫がいかに生活に苦労したかを詠じた詩であるが、冒襄の作にも同じように、明清王朝交替期の苦労が投影されている。また、冒襄が友人たちと唱和して作った詩でも、しばしば杜甫の詩への和韻が行われている。例えば、杜甫が宴席の場面を詠じた「陪鄭広文遊何将軍山林」詩に、冒襄をはじめとする数名の文人が和韻した「庚寅春杪辟疆同于皇孝威園次枉集寓園用少陵遊何将軍山林韻八首」などである。
また、冒襄が書いた散文においても、しばしば杜甫の詩が引用され、そこにみずからの状況を重ね合わせようとする意図がうかがわれる。冒襄の周辺にあった女性たち、董小宛、呉扣扣など、いずれも杜甫の詩と関連があったことも、発見の一つである。

研究成果の概要（英文）：
A lot of works on Du Fu, high Tang poet such as annotations and echoes of his poems appeared in the early Qing period. Having experienced the Ming-Qing transition, literati at that time expressed their thoughts and feelings through Du Fu’s works. The aim of this research is to understand why and how they treated the works of Du Fu.
Through three years’ research I have collected the related materials of more than forty thousand characters. As a case study, I observed how Mao Xiang, a late Ming and early Qing man of letters dealt with Du Fu’s poems. He composed not a few poems which had the same rhymes with Du Fu’s poems. His concubines were also interested in Du Fu’s poems. I could trace several aspects of their acceptance of Du Fu’s poems in the early Qing period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：明清、王朝交替、杜甫、詩学、冒襄

１．研究開始当初の背景

明の崇禎１７年（１６４４）、明王朝が滅亡し、まもなく満州人の王朝である清に取って替わられる。清朝は、再三にわたる「文字獄」を行うなど、漢人知識人に対してきびしい姿勢で臨んだ。漢人知識人の屈折した意識は、詩作品、あるいは詩学（詩の解釈学）の場において、きわめて隠微な形であらわれる。そんな状況のもと、清初の時期には、杜甫の詩についての選集、注釈、批評などが数多く生みだされている。本研究は、当時の人びとが好んで杜甫の詩を取り上げた理由、また彼らの仕事の従来の杜甫解釈との相違点などの分析を通じて、明王朝の滅亡、清王朝の支配という大事件が、中国詩学に、どのような影響を受けたのかを明らかにすることを目的とする。研究が最終的に目ざすのは、詩文、戯曲、小説その他を含んだ明末清初期における文学の全体であるが、それはきわめて大きな対象であるので、まずは明末清初における杜甫の問題を集中的に取り上げることにした。

２．研究の目的

清初の人びとが、こぞって杜甫を取り上げたことには、どのような精神的な背景があったのか。それは明清の王朝交替と深い関係があるのではないか。そしてまた、この時代の杜詩学、杜甫詩の解釈は、それ以前の時代の杜詩解釈、たとえば明代の古文辞派の人びとの取り上げた杜甫とどうちがっていたのだろうか。まちがいなく中国詩学の重要な中心の一つである杜甫の詩の解釈の、明末清初における解釈の変化を考えることによって、中国伝統詩学全体、杜詩解釈全体の見直しの可能性をさぐることを目指した。

３．研究の方法

清初期における杜詩の全貌をうかがうことが本研究の目標であるが、資料としては、注釈、批評、詩選など、書物としての形をなしたもののほかに、当時の人びとの著作の中にあらわれる個別の文章をも収集し、分析を加える必要がある。
まずは、断簡零墨までをも含めた、清初における杜甫についての資料集を編む必要がある。既存の資料集などに、収録されていない資料はまだまだ数多くある。
そのように、広く杜甫に関する資料をさぐる一方で、とりわけ関係の深い文人の作に的をしぼって、深く検討する必要も生ずる。ここでは、明末清初の文人冒襄をその一つのサンプルとして取り上げることにした。

４．研究成果

三年の研究期間の間に、冒襄及びそれ以外の明清文人の杜甫に関する資料を集め、４万５千字分にも及んでいる。その整理作業をなおも継続して行っている。
冒襄自身の詩作についていえば、そこにはしばしば杜甫の詩に和韻を試みた作を見ることができる。例えば『樸巣詩選』に収められる冒襄の「感懐七歌　倣杜少陵体」のうちの第一首、

有客有客採蘭芷　　客有り　客有り　蘭芷を採る
搴芳潔岸称男子　　芳を潔岸に搴りて男子と称す
峙山渟海当中立　　峙つ山渟き海　中に当りて立つ
進退取舎準廉恥　　進退取舎　廉恥に準ず
十年遺落埋故紙　　十年　遺落して　故紙に埋まる
英雄之志徒爾爾　　英雄の志　徒らに爾爾たり
嗚呼一歌兮歌未充　　嗚呼　一歌す　歌未だ充たず
寸心揺曳如飛蓬　　寸心　揺曳して飛蓬の如し

は、杜甫の「乾元中寓居同谷県、作歌　七首」の第一首、

有客有客字子美　　客有り　客有り　字は子美
白頭乱髪垂過耳　　白頭の乱髪　垂れて耳を過ぐ
歳拾橡栗随狙公　　歳　橡栗を拾ひて狙公に随ふ
天寒日暮山谷裏　　天は寒く日は暮る山谷の裏
中原無書帰不得　　中原　書無くして帰ること得ず
手脚凍皴皮肉死　　手脚は凍皴し　皮肉

は死す
嗚呼一歌兮歌已哀　　嗚呼　一歌す　歌は已に哀し
悲風為我従天来　　悲風　我が為に天従り来る

にならった詩であるが、形式ばかりでなく、杜甫が生活に苦労した中で詠じた詩に唱和した冒襄の作にも、同じようにその明清王朝交替期の苦労が投影されているということができる。また、冒襄が友人たちと唱和して作った詩でも、しばしば杜甫の詩への和韻が行われている。
また、冒襄が書いた散文においても、しばしば杜甫の詩が引用され、そこにみずからの状況を重ね合わせようとする意図がうかがわれる。冒襄の周辺にあった女性たち、董小宛、呉扣扣など、いずれも杜甫の詩と関連があったことも、発見の一つである。一例を挙げるならば、冒襄が側室にしようと思いながら、正式に側室になろうとする直前に病を得て早世してしまった呉扣扣という女性について、冒襄が語った彼女の思い出を、聞き書きの形で陳維崧が記した「呉姫扣扣小伝」(『陳迦陵文集』巻五）にも、冒襄、呉扣扣と杜詩に関する記述がある。

　彼女に詩詞を教えると、すぐに覚えて朗唱した。時折、屏風のかたわらから、鶯の雛のような声が聞こえてきた。彼女はとりわけ『文選』と杜詩を読むのが好きで、かつて杜甫の「北征」の古詩を教えた時には、たった三回読んだだけで、本を閉じて暗誦し、朗々と一字も抜け落ちることがなかった。

杜甫の「北征」は、至徳二年（七五七)、安史の乱のさなか、粛宗の行在所である鳳翔から、家族の疎開する鄜州に帰った杜甫が目にした、戦乱によって荒廃した道すがらの光景、家族との再会、そして唐朝再興の祈念を詠じた、五言百四十句からなる長編の古詩である。冒襄がわざわざ扣扣に杜甫の「北征」の詩を選んで教えたのは、おそらく明末清初の王朝交替に関わる戦乱の凄惨さが、杜甫の「北征」と重なるところがあったからであるとも考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①大木康、アジア漢字圏における本と読書、宮下志朗編，文学のエコロジー、査読無、2013,102-140.
②大木康、明末画本的興盛及其背景、周生春・何朝暉編，印刷与市場国際会議論文集、査読有、2012、222-233.
③大木康 、彭剣南の戯曲『影梅庵』『香畹楼』とその時代、東洋文化研究所紀要 査読無、第 161 冊、2012、1-85.
④大木　康、中国演劇における鍾馗－古典から現代まで－、観世、査読無、第 78 巻第 5 号、2011、28-34
⑤大木　康、馮夢龍『山歌』と妓女、万葉古代学研究所年報、査読無、9、2011、79-86.
⑥大木　康、冒襄における杜詩、東洋文化研究所紀要、査読有、158、2010、1-34.

〔学会発表〕（計２件）
①大木康、明末「悪僧小説」初探、近世意象与文化典型、中正大学、台湾、嘉義 2012.11.29.
②Yasushi OKI, 'Golden Mansions Are to Be Found in the Books', The Literature of High Stakes and Long Odds, University of Massachusettes, Boston, USA, 2012.11.18.
③大木　康、從「書場的講故事」到「案頭的讀物」―馮夢龍〈三言〉在日本江戸時代的接受―、海外漢籍研討会（招待講演）、2011.5.14、中国・澳門大学
④大木　康、江戸時代人の対中意識－「漢」と「唐」をめぐって－、日本意識と対外意識、2011.7.17、東京都・法政大学
⑤大木　康、The Yellow Peony Poetry Party in the late Ming、The Ninth Asian New Humanities Net Annual Meeting（招待講演）、2011.10.15、中国・上海交通大学
⑥大木　康、從「說話」到「讀物」―以馮夢龍〈三言〉和上田秋成《雨月物語》為例―、韓国中語中文学会、2010 年 11 月 13 日、 韓国外国語大学（韓国・ソウル）

〔図書〕（計２件）
① OKI Yasushi and Paolo Santangelo. *Shan'ge, the 'Mountain Songs'*. Leiden, Boston: Brill, 2011、614 頁.
②大木康、現代語訳　史記、ちくま新書 筑摩書房、2011、250 頁.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/oki.html

６．研究組織
(1)研究代表者
東京大学・東洋文化研究所・教授
大木　康（OKI YASUSHI）
研究者番号：70185213

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：